

グリーンレター編集委員座談会

# 都市の自然を考える

田村 明さん(法政大学教授)



瀬田 直哉さん(環境庁環境影響審査課長)

## 都市自然の象徴

—— 大変なカルガモ人気ですが、ご覧になりましたか。

瀬田 いいえ。でも、思うことはいくつかありますね。

あれは一つの都市のパフォーマンスじゃないかと思うんです。舗装された道路と高層ビルがあって、その中でほかの自然と一体感を持たないで、それだけが、何ものにもわずらわされないで自由に歩いている。ほかの自然とのかかわりで見るというよりも、非常に抽出されたものがせわしい都会という人工空間の中を、よちよちお渡りになる。そういった祭事というか、カルガモの一年一度の行事が人の関心と呼ぶということ、行事だから絵になるということがあるんですよ。

田村 だれが言い出したんですか。あんなに騒ぎになって。

岡島 去年、テレビが「カルガモ日記」というのを始めたんです。それが引き金になったと思うんです。

あれはマスコミの方から言うと、「これもニュースだったのか」ということだと思いますね。あれは普通にどこでもあることで、動物の好きな人はいろいろな所で見ている。でも一般の人に改めて、動物もちゃんとよく見るとやっぱりかわいいよ、ということをお教えたいと思うんですよ。

要するに一般の人に、「動物はやっぱりちよつと大事にしてやった方がいいね。その方が楽しいね」ということを。あのカルガモはスターだったけれども、それを通じて教えたことは非常に大きな効果があったと思うんですよ。それから、やっぱりあのアスファルトを渡っていくのがおもしろかったと思うね。

瀬田 一列をなすということがね。

岡島 そんなのも昔の人が見れば、雁だつてそう行くんだろうし、決まった時期に行くのが当たり前のことなのかもしれないけれども、改めておもしろ



(読売新聞記者) 岡島 成行さん



(東洋経済新報社記者) 小倉 正男さん

「戦前の都市と戦後の都市では、全然違う都市だと思う。」  
 「住まいと勤め先は空中で、その間は地下にもぐっている。」  
 「暮らしてから自然まで、もうちょっとリッチにしないと。」  
 「今一番大きな問題は、社会資本の充実。緑もその一つ。」  
 「一番身近な都市の自然は、さまざま問題をかかえている。」  
 本誌編集委員が、これからの都市の自然を語る。

ろいなと思って。  
 小倉 カルガモが割合ありふれた鳥だなんていうのは、私を含めまして今の一般の人は知らないんじゃないですか。ありふれた鳥だと言われれば、ああそうなんですとかということになるんじゃないかも。  
 それに昔は、アイドルが、例えば力道山であったり、長島であったり、王であったりというようなところだった。要するに人間だった。ところが最近、エリマキトカゲとか、コアラとか、カルガモとか、動物界からアイドルが出ているという現象がありますよね。この辺も自然がなくなっちゃって、反面やっぱりどこか潜在的に自然を求めて

ることのあらわれじゃないでしょうか。  
 田村 基本的に自然がなくなっちゃったということの対比的な現象です。ね。一口で言えば都市化という現象で、自然がなくなってきた。だから、あたりまえの自然というものの価値までが改めて見直されたのが、カルガモで象徴されたと思うんですよ。  
 もう一つは、さっき瀬田さんが言われた、大きなビルの建つまんなかのアスファルトのところを歩いているという違和感。そういう自然と人工というのが非常に対比的に、象徴的にあらわれているわけでしょう。

岡島 一言で言う絵になるんですよ。パチッと写真に撮るとね。

田村 まさに人工そのものところにも自然というのが生きているんだなということを感じさせる。その対比が余りにも極端だという。だから、都心部でなければそれほどのニュースにならないけれども、都心部だからこそニュースになる。都市化現象がそこまで進行しちゃった。だから、本当に自然界のごく普通の、わずかな現象でさえ乏しいことを示しているんですね。しかも、それが人工物と対比されたときに、ますます意外性という意味のニュース性が出てくる。そういう状態ですよ。

岡島 あと二、三年であまり騒がれなくなるかもしれないけれども、新聞とかテレビなんているのは、ファーストハンドというか、最初の話なんですね。投げかけるものであって、その先

を考えたたりするのは普通は別なメディアがやるわけです。

今ここで、カルガモが話題になって入ってきても、この騒動の第二段階に入ってきているわけです。あつちこちで東京だけのカモがカルガモじゃないとかいうのが新聞に出たりとか、いろんな雑誌なんかこれから出てくると思うんですよ。それでようやく固まってくたのであって、そういう取っかかりの話題を提供したというのは非常によかったと僕は思っているんですよ。この次の段階で、おそらくいろんな雑誌の対談なんかで、きょうと同じように、カモについてあれはおかしいとか、あれはこうだという話がいっぱい出てくるようになると思います。

### 「残った」から「残す」へ

——とにかく自然志向がだんだん強くなっていく。

岡島 今はこの町へ行ったって「水と緑」じゃないですかね。流行なんですよ。けれどもね。何でも「水と緑」と言っておけば住民は納得するみたいなのところがあつてね。

田村 水緑都市とかね。国土庁でもやっていますよ。僕はスイリヨクと言うから水力発電かなと思つたら「水と緑」だつて。(笑)

小倉 今は「水と緑」がないからならんでしようね。ないから、逆に志向も出るという。ビルの屋上を空中庭園みたいにしてるところが幾つもある。バードサンクチュアリといいますかね。

これも自然があると言えばあるんだけれども、逆に言えば、ないからビルの上まで空中庭園にしなきゃいかんみたいな、一つの反映なんですよ。けれどもね。

岡島 下町の鉢植えなんかもそうですよ。せめてここくらいということ、どこかの家に行つたつて、下町に行くとか路地にずっと並べていますね。基本的にいいことだとは思ふ。ただ田村先生がおっしゃるように、なくなっている現実があるからそういうことが続いている……。

東京は緑が豊富かどうかというのを考えるとき、みんな東京で緑が多いよなつて言うんですよ。日比谷公園を歩いたとか、こういうところへ行つたとか、いろいろあつて多いと言うんですよ。

でも、例えばニューヨークのセントラルパークと比較すると、やっぱり東京というのはいわゆる少ないわけですよ。だから、今の東京でも多いと感じるようになるかと思ふんですよ。

小倉 そうなんです。関西あたりから転動してきた人にきくと東京は多いと言つてですね。

田村 僕は東京生まれの東京育ちだけれども、かつて大阪に長くいました。そのときに感じたのは、大阪は都市の中の緑は猛烈に少ないんですよ。しかし周辺にはあるんです。六甲山とか生駒山とか。大都市の中から山が見えるというところに僕はびつくりした。でも、

肝心な街の中にはないんですよ。なぜ、ないのかと数字を見てみると、公園面積や何かでは必ずしもそう極端な差があるわけではない。

東京も似たようなものだけれども、東京はそういう面積に入っていないところで、結構あるわけです。皇居を初めね。明治神宮の森だつてそうでしょう。だから、そういう数字じゃないところ、差がついている。東京の場合は、やっぱり徳川幕府以来、権力の中心にあつた結果が何らかの形で、残されてきた。明治神宮みたいに明治政府から新しくつくつたものもある。全国の木を集めて明治神宮をつくつたわけですよ。帝都といわれた東京でなきゃそれはできないですよ。

小倉 お金もかかるし。

田村 お金だけじゃなくて、浄財というか、集められる権力ですよ。

瀬田 僕は長崎に住んだことがあるんですが、長崎も緑がないんですよ。でも、海が見える。海を見ていると、海も実は緑と同じだという気持ちがないんですよ。海が光つているときは、春の海だとか、そういう感じがして、緑が少なくていいかなという気がしたんです。海を見れば、まあ緑がなくても自然はあるなという気はするんですよ。

小倉 私も神戸にいたことがある、会社に出るときにはちやうど海を見ながら行くわけですよ。やはり海というものは毎日、毎日表情があるんですよ。キラキラと輝いてるときとか、

ドヨンとよどんでいるときとか、やっぱりあれはいいものですね。何て今日は、カイシャに行くのかなという感じで。(笑)

田村 都市計画的にいくと、広い意味でオープンスペースということでしょう。でも、なぜ海はそうなのか、砂漠はそうでないのか。よく砂漠地帯へ行くと、海というの生命を生きるんです。海というのは生命の象徴でしょう。両方とも命があるということなつた印象をうける。

片方の砂漠、ゴビ砂漠なんていうのは本当に厳しいものです。礫ですよ。現実には余りロマンチックじゃないのね。一晚旅行したつて同じ景色でしょう。砂の海と言えは海なんだけれども、生命がない。あるいは大変少ない。ここでは生命は、やつと片すみで息をしているんですよ。

だから、砂漠の町に行くと、やっぱり緑というものをすごく大切にしますよ。サウジのリヤドなんかに行くと、木を枯らすと処罰されるというんですよ。街路樹には管理者がいて、何本ずつか持っていて、それをサボっていると処罰される。緑を保持するためにものすごい努力をしてる。水をまいて何とかそれを保持させている。

それに比べて、非常に対照的なのが東南アジア。モンスーン地帯だからとか雨が多くなる。つまり水があるものだからむんむんするよな緑。砂漠地

帯とモンソン地帯には、こういう余りに対照的な違いがあるんだけど、やっぱり日本もモンソン地帯だから、僕はちよつと緑ぼけをしていて、自覚症状がまだないんじゃないですか。

——要するに今ある緑はまさに残った、結果として残ったものなんで、これからは意識を変換して、積極的に残すという姿勢に出なきゃだめだ。

田村 そう。それを私は強調したい。あるじゃないか、あるじゃないか、というけれど権力があつたところだから残っているんですよ。あるいは、自然の地形がそうになっているから残っているんですよ。それからモンソン地帯だから、雨が降るから何となくあるんですよ。

何も努力しないで、緑が残ったところがあるんじゃないかということなんで、本当に緑を残していくとか、つくるかというのは大変ななかった。それをどうやって転換していくかが今後の課題ですね。

### 都市の質的变化

田村 戦前の都市と戦後の都市と大きく簡単に分けても全然違う都市だと思ふ。二十世紀は、都市というものもの質を変換させたと思ふんですよ。それ以前の都市というのは総人口の割合とかが一つの基準でした。ところが、二十世紀の間にこれを逆転させて二十一世紀になつちやたら大体八割から九割が都市にいて、残りの一割が別の地域にいる。ちよつと逆になる。こう

いう変化は今世紀になって始まつたわけだから、今の都市はもうそれ以前の都市と同じじゃないんですよ。

昔は都市で効率よく稼いで、あとはほかへ行つて、楽しんでいけばいいやということだった。でも今は、そんな人はほとんどいなくなつて、都市で生まれ、育ち、学び、働き、そして都市で死ぬという人間が圧倒的多数派にならざるを得ない。そうすると、意識的に計画的にそういう人間のトータルな環境としての都市につくりかえなきゃいけないと思つているわけです。

瀬田 最近エコポリスという言い方をしますね。果たして東京のように、二千万、三千万という大都市圏が、そういうエコポリスというものになり得るのか。あるいはもっと小さな、人口二十万、三十万という都市でそれをめ

ざすのかというのが一つあると思ふんです。

先日、清水市に行つた時に、わずか二百平米くらいの、学校の体育館と三階建ての校舎の間に、日本平から土を持ってきて、そこにいろんな植物を植えて十年くらいたつたら、今では二百数十種類の昆虫を確認しているというんです。

鳥も二十五種類来て、そのうちここで繁殖を確認したのは五種類あるというんです。本当に小さい坪庭みたいなものの中に、ものすごく多種類の植物があり、そこに昆虫、鳥が来る。

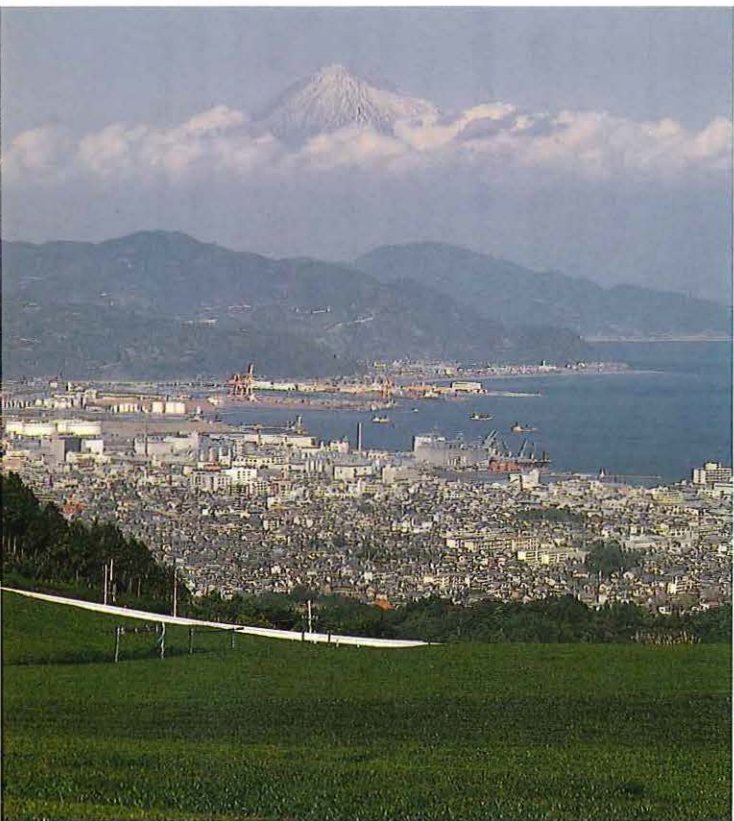
どうしてそれだけいろいろなもの確認できるかというと、やっぱり三キロくらい離れたところに日本平という自然系があるためじゃないかと思ふんです。人口が三十数万なり五十万近く

になつても、日本平のような自然の宝があれば、都市の中にも自然系を持てる。そういうのがエコポリスかなという気もしたんです。

田村 本当にこれからどういう住み方をするのか。僕は大都市否定論者ではないんだけど、でも、じゃ、巨大都市だけあつていいのかというのは、どうもこれはそうじゃないんじゃないか。今のお話は、ものすごく都市化されている中でも、ある程度人工的にも頑張れば、何とか行くということの一つの小さな実例じゃないかな。そういう実例がやっぱりどこかでは積み上がつてこないといけないんじゃないかなと今つくづく感じる。

岡島 ともかく東京圏を全部合わせると人口三千万でしょう。これは異常なくらいの集中ですよ。これは日本というところは、必ず東京のまねをする。信州の松本に行つたつて、駅ビルなんて全部同じ形で、新宿の駅ビルみたいな感じがする。東京圏だけならともかく日本中がそうなつちやうと本当に困るなと思ふ。東京圏はちよつときつと思ふけれども、地方都市ならまだ努力すれば何とかなるような期待はあるんですよ。

田村 まず東京か地方都市かというところ、それは僕も東京だけじゃなくて、地方都市を重視するべきだと思ふ。しかし、いずれの場合でも、これからの都市のライフスタイルの中に自然、そして緑とか、水とかをどうやって入れるか。大都市の場合には特に厳しい



けれども、地方都市だってそれなりの問題がある。政策としては、地方都市の方は大都市と格段にちがう環境をつくれるはずですね。

いじめ現象だって、広い意味では都市化現象のはね返りじゃないかなと見ているんです。だからもう一遍、新しい都市のつくり方を考えなきゃいけないし、その中で緑とか自然の問題を考えていかなきゃいけないだろうと思います。従来はそういうのがなくても都市としては十分成立していたわけなんだけれども、これからの都市はそれでは成立しないのではないかと思っ

ているんです。ただ、それを具体的な方法としてどうするかという事は、これからの大課題なわけです。

都市に人が一生住まなくてもいいよ

うな時代の方がはるかに緑が多かったけれども、人が一生住まなくてはいけなくなつたような時代に緑がなくなつてくる。逆になつてきているんですよ。

岡島 本当の質のいい緑に囲まれた質のいい都会、例えば東京になる前の江戸みたいな都会に住んでいた人が東京へ急に来れば、あつと驚いて、こんなのは住めないと思うんだらうけれども、徐々に徐々にこうなつてきたから慣らされてきているんじゃないかなと思

とかいわれているけれど、結局はリツチですよね。戦勝国のストックはやっぱりすごい。

岡島 内需拡大とかいろんなことを言われているけれども、基本的には社会資本の充実を完全にしないとね。西欧諸国はわからないところで金がかかっていますよね。

### 本当のパブリックを

瀬田 住み方、接し方にも問題があると思うんです。平屋で土があれば、モンスーン気候ですから、緑は意識しなくても出てくる。ところが私みたい

に今住んでいるところが五階であり、勤め先は二十一階である。ということ

は空中に住んでいて、その間は地下鉄で地下をもぐっているわけですよ。二



十一階で見ている緑というのは、日比谷公園を見ても、上から俯瞰しているだけですから、空間としては見られる

んですけども、本当の緑じゃないと思

っているんですよ。どうも触れられ

るところにはないという感じなんです

ね。子供にとっては、ずうっとそういう

状況であれば一体どうなるのかなという

気がしますね。

小倉 地方都市との対比で言うと、東京

には、海、山、川がないんですよ

ね。地方へ行くと子供が夏は川で水遊

びしているわけですね。東京だと、プ

する対象があつたとしても、それに全然接していないという状況があるような気がする。皆あきらめているんですよか。

瀬田 僕は昼飯の時に公園に行く。それがあ

るだけまだいいんですけどもね。

岡島 都会で、例えば「自分の家

庭をつくりたい」「庭つき一戸建て」

なんていうのはかなりの人間があきら

めているでしょう。

田村 大都市での住み方としては一

戸建てで、自分たち銘々が庭を持つ

という方式はあきらめてもらわなきゃ

本的にはだめだと思つてますよ。た

あきらめるとい意味は、全然あきらめる

のではなしに、集合住宅的なところ

らだつて、かなり緑を取り込んだ生活

はできる。公的な緑だけでいいとい

うのも僕はどうも反対なんだね。それ

は少しサボり過ぎている。やはりも

っと豊かなテラスを持つたり、緑した

たような集合住宅を、多少贅沢になる

けれども、つくればつくれるんです。

そのぐら

いの贅沢さは、土地を放棄した

生まれてこなければいけませんね。

瀬田 「チップス先生さようなら」

を書いたJ・ヒルトンの小説に「巡るときは再び」という小説があるんです。主人公が、ニュータウンを恋人と歩いている、その恋人が「この街路樹は父さんが植えた木なのです」という描写があったんです。私もやはり娘にそう言わせたい。そこに住んでいる人たちが「これはお父さんが植えたんだよ」とか、「お母さんたちみんな植えたんだよ」という街でなければいけませんか。そういう自然と人間あるいは空間のつき合いが必要になってきているという気がしますね。

### 都市化時代の重要テーマ

小倉 街という感覚も非常になくなっているように思う。最近、企業もすぐ街づくりだとか、「六本木のアークヒルズも街なんだ」とみたいなことをいうけれども、これも逆に言うところ、感覚もなくなっているからなんです。ですから、私なども、横浜に住んでいるけれども、自分の街だという意識がない。自然に対しても自分の木を植えるよとか、そういう発想はなかなか出にくいですよ。

岡島 そうですね。横浜なんかもうだけれども、よそから来た人の方が圧倒的に多いわけですよ。大体またどこかへ移ろうとか考えていて、街意識なんかまずない人が多いんじゃないですか。

具体論じゃないけれども、ここにす

うと住むんだという雰囲気と、みんな何ともしようという感覚を持たなきゃいけない。

田村 先日、こういうことがあった。新宿の中央公園を近くのホテルの上から見ていたんです。それで、何の話か僕らは、この辺の裏を売った土地が、ひと坪五千万円ぐらいで取引されたという話をしたわけです。そうしたら、途端に「そんな高いんですか。公園にしているなんてもったいないですね」と言うんですよ。自分に関係ないんですよ。関係ない話も、五千万円もするんだしたら、ここへビルを建てちゃえばいい、そういう考え方があるんだね。



この辺を基本的に変えていかないとだめですね。

岡島 流れとしては、日本という国は明治時代からずうっと非常時の連続だと思っただけです。戦争をやった、勝ったり負けたりして。太平洋戦争が終わったら復興に十年か二十年かかって、高度成長で追いつけ追い越せという非常時。

そういう意味で、都市のつくり方だとして基本的には余り考えていなかったと思う。ちよつと余裕ができたというのはここ十年くらいじゃないかな。都市の緑をどうしようかというのは、これから始まるんじゃないかと思っただけです。

小倉 企業は田高で、今でも戦争なんです。本屋さんに行くと、戦記本のコーナーがドカンとある。実際の戦争では負けたが、経済戦争をやっている感じなんですよ。でも一方では、企業も、文化や緑がないと消費者は目を向けてくれない。だから、そういうものを取り入れていこうという感じがある。一般の消費者もそういう考えをかなり意識的に持つていい。日本も家から暮らしてから自然まで、もうちょっとリッチにしていけないとどうしようもないと思います。

田村 よく言われることだけれども、経済の中で、フローじゃなしに、どうやってストックの形に転換できるかというのが都市化時代の大変重要なテーマだと思っただけです。

戦後、なぜそうなっちゃったかとい

うと、戦後は復興だったわけですよ。復興というのは、ないよりあればそれでいいという価値観です。それを高度成長のときに切りかえるべきだったんです。高度成長というのはお金がそれだけ伸びるんだから、質的なところへどんどん転換できるはずなんです。だけれども、復興的価値観のまま量的に拡大しちゃった。ところが、ヨーロッパなんかは違うんですね。復興のときに、伝統的な教会はこうするとか、まづ質の問題を問うているわけです。日本はそうじゃない。

瀬田 区画整理なり、いろんな都市再開発をやるとき、つまり、都市のリズムとかサイクルが変わっていく中に、緑なりをどう組み入れていくのかということになっていくんだと思っただけです。

田村 内需拡大だと言っているけれども、内需拡大の中にどうしても質的な要素が入らないと本当の内需拡大じゃないと思っただけです。従来同様の、つまり日本の復興型をやっちゃったら全然意味がない。

岡島 今一番大きな問題は、社会資本の充実じゃないでしょうか。二十一世紀になる前に今のうちにやっておかないといけない部分がいっぱいあるんじゃないかと思っただけです。

——本日はどうもありがとうございました。

GREEN LETTER